



冬のアラスカ山脈冬季単独登頂に挑み続ける 栗秋^{まさとし}正寿さんを迎え

植村直己冒険賞授賞式・記念講演会

「アラスカ 垂直と水平の旅」



▲険しいルートが連続するハンターの頂上を目指す栗秋さん(2010年)



▲中貝市長から盾と記念メダルを受け取り記念撮影に臨む栗秋さん

6月4日、日高文化体育館に2010「植村直己冒険賞」受賞者の栗秋正寿さん(38歳・福岡市在住)を迎え、15回目となる授賞式を開催しました。

栗秋さんは、アラスカの自然に魅せられ、1998年、世界で4人目、史上最年少でマッキンリー冬季単独登頂に成功し、2007年、世界初のフォレイカー冬季単独登頂に成功しました。中央アラスカ山脈を代表する三つの山のうち、残すハンターにはこれまで5度挑戦し、悪天候により登頂を阻まれてきましたが、これからも冬季単独登頂に挑み続けます。

当日、選考委員の河合雅雄さんの選考評に引き続き、中貝市長から盾とメダルを受けた栗秋さんは「大変光栄な賞を頂き感激です。植村直己さんの人と自然に対する謙虚さをもっと学んでいき、今後も無事に戻ってくることに重点を置いて挑戦を続けていきます」と受賞を喜びました。

式の後、「アラスカ 垂直と水平の旅」と題した記念講演が行われ、約800人の観衆を前に、映像を使って冬のアラスカの山々に挑み続けた冒険の足跡やアラスカの人々との交流など、エピソードを交えながら話しました。また、自身が雪洞で作曲した曲をハーモニカで演奏して、観衆を魅了しました。

終了後には、植村直己さんの出身地区の国府地区公民館に会場を移動し、「受賞者を囲む会」が開催されました。地元有志や植村さんの同級生など約100人が、心のこもった手料理で栗秋さんをもてなし、授賞式では聞くことができなかった話や植村直己さんの思い出話などで大いに盛り上がりました。

《問合せ》植村直己冒険館 ☎44-1515



▲選考委員の河合雅雄さんが「栗秋さんは、周到的な準備をし、冷静な判断で退却する勇気を持ち、再度挑戦する精神は冒険家として立派」と選考評を述べた



▲オープニングでは、府中小学校3年生の児童が植村直己さんをテーマに「自分たちの未来・希望を信じる!」と題し、歌などを披露した

「アラスカ 垂直と水平の旅」



▲記念講演会で冒険の足跡を振り返る栗秋さん

■きっかけは一本の映画から

15歳の時に友人から誘われて見た「ラブストーリーを君に」という映画に出てくる北アルプスの美しい山々の景色に強く感動しました。「この目で見てみたい、体験したい」と思い、高校では山岳部に入学しました。厳しいトレーニングを重ね、大学山岳部では、冬山訓練のため、鳥取の伯耆大山などに何度も通い、冬山の基本の技術を習得したことが、今となって冬のアラスカ登山の基礎となっています。

■アラスカとの出会い

大学山岳部の時、海外初登山で夏のマッキンリーへ行き、幸運なことに無事頂上に立つことができました。この登山でアラスカのスケール

の大きさ、自然の美しさ、さらにその神々しさに深く感動し、再び訪れたいと思い、完全にアラスカにほれ込んでしまいました。そして、マッキンリー登山中に背後に見えたハンター、フォレイカーへの登山を計画しました。

■垂直の旅

大学院を休学して、単独でハンター、フォレイカーに登り、冬の名残がある季節にアラスカ山脈への単独行を経験することで、恐れるだけであった冬のアラスカの山々が目標へと変わりました。冬のアラスカの気象データ、装備や耐寒訓練など周到な準備をし、1998年の2回目の挑戦でマッキンリー冬季単独登頂に成功し、2007年には世界初となるフォレイカー冬季単独登頂に成功することができました。「山を旅する」中で、孤独な時間を過ごしながら、大自然と一体となり、もう一人の自分と対話をすることで、自分自身を高め、強く優しい人に近づくことができるのではないかと思います。

■水平の旅

1998年に太平洋側のアンカレッジからリヤカーを引いて北極海側のブルドーベイに向けて出発しました。山旅と同じように一歩一歩ゆっくりと自分の足で歩き、時速4キロメー

トルでしか発見できないアラスカの自然とそこに生きる人々の呼吸を感じながら、1400キロメートルを縦断しました。途中で四つの学校でスピーチをし、家族のようなアラスカの人々の優しさに助けられ、大自然に励まされながら、充実した旅をすることができました。この旅でのアラスカの人々との交流は今でも続いています。



▲リヤカーを引きアラスカの大地を北上(1998年)

■手ごわい山「ハンター」

アラスカ3山のうち、一番標高が低いですが、ルートのは傾斜が40〜50度、場所によっては70度もあります。気温もマイナス50度を下回り、強風対策のため、約4時間かけて雪洞を掘って、その中で天候の回復を待ちます。2010年の通算5回目の挑戦では、天候が悪く停滞を余儀なく

され、83日間のうち、雪洞で53泊しましたが、これまでの最高となる3300メートルまで到達しました。無事に下山するための食料や燃料が少なくなつたので、断念して下山しました。下山時はずっと晴天で、悔しい思いをしましたが、おかげで無事に下山できると思いい、今ではその天候に感謝しています。



▲雪洞内で登頂のチャンスをひたすら待つ(2010年)

■かけがえない命を大切に

今もまだ挑戦の途上ですが、自然が相手であるため、どんなに人間が頑張ってもどうしようもない時があります。人間が自然に耳を傾けて自然の都合に合わせる登山のスタイルを、ずっと続けていきたいと思えます。何よりもまず、命を大切に、ダメな場合は勇気ある撤退をし、再び挑戦をしていきたいと思えます。